



『トクシマ・アンツァイガー』

第20号

徳島 1915年8月15日

ロシア領バルト海沿岸地方のドイツ人の歴史

ドイツ軍はクールランドを占領し、リバウ、ヴィンダウ、ミタウを手に入れ、デューナブルクとリガに迫っているが、まもなくリーフラント [リヴォニア] とエストニアに進攻するだろう。

ドイツ人は皆このニュースに感激したが、それはこのことが常勝ドイツ軍のさらなる進撃だからというだけではない。この場合、重要なのは戦いそのものよりもそれがなされた場所なのだ。東部戦線左翼の勝利は、単なる勝利以上のものだ。それは、かつてのドイツ領への進撃であり、この地方は今なおドイツの精神活動とドイツ文化の強い影響を受けているのである。

ロシア領バルト海沿岸地方のドイツ人の歴史は、中世までさかのぼる。12世紀の終わりに、最初のドイツ人移住者たちがこの土地にやってきたが、

そこには以前からリトアニア人、レット人、エストニア人が住んでいた。1201年、大司教アーダルベルト・フォン・ブレーメンがリガを建設した。同じ頃集まった剣友騎士団¹は、この地方の大部分を征服し、キリスト教と西欧文化を広めた。この地方にとってそれよりも重要なのがドイツ騎士団で、彼らは厳格に組織された自分たちの諸国家を作り、それらは何世紀にもわたってスラヴ人の攻撃に屈しなかった。この地方に残る幾多の古城は、今なおこのキリスト教騎士団を想起させてくれる。彼らはここに十字架と剣をもって植民し、きわめて大きな成果を上げた。それと同時に、この頃最盛期にあったハンザ同盟が、リューベックを盟主として、リバウ、レヴァル、ミタウ、ドルパートなどのいくつかの都市を建設した。これらの町は、その一部がそれ自体ハンザ都市となったし、また今日まで非常にドイツ的な性格を保持している。

ただ、以下のような事実によってこれらの地方の完全なドイツ化が妨げられた。隣接するプロイセンではドイツ人の入植の密度が高かったので、時とともに古くからいたプロイセン人²は、ドイツ人の中に完全に呑みこまれてしまったが、今日のロシア領バルト海沿岸地方へのドイツ人の移住は、それほど頻繁ではなかったので、そのような成果をもたらさなかったのである。

1560年まで、騎士団の諸国は独立を守ることができた。しかし、そののちは優勢な敵、東西と南からのスラヴ人の力による圧迫に屈した。1561年、リーフランドはポーランド領となり、エストニアはスウェーデン領となり、クールラントはさしあたりポーランドの総主権のもとで独立した公国にとどまった。1795年、これらすべての地方はロシアに併合されたが、それまでは波乱に富む運命をくぐりぬけていた。最初、これらの地方とそこにいたドイツ人たちは、ロシアによる秩序ある、またこう言ってもよい

1 1202年創設

2 この「プロイセン人」は、ドイツ系住民の植民以前からプロイセン地方にいたスラヴ系原住民で、のちのドイツ人によるプロイセン王国と直接の関係はない。

と思うが、穏やかな統治のもとで再び繁栄した。

しかし、前世紀の70年代には、バルト人一すなわちロシア領バルト海沿岸地方のドイツ人一の、文書化され、皇帝（ツァー）によって保証されていた権利が尊重されないままに、力づくの攻撃が彼らに対してはじまる。容赦のない厳しさで、彼らをロシア人に同化しようとしたのである。

しかし、それにもかかわらず、ここに入植したドイツ人は滅ぶことなく、ロシアに非常に多くの偉大な政治家や将軍、学者を提供してきた。ドルパートにおけるドイツ系の大学が閉鎖され、ドイツの公立学校が禁止され、ドイツ語の礼拝に対してありとあらゆる妨害がなされたのちになっても、われらの優れたバルト人たちはひるむことなく、ロシアの意志に逆らってさえもドイツ人であり続ける方法を見出した。もちろんそれは、政治的な意味においてではなかった。この点では、彼らは自分たちの国がロシア領になったときから、つねにロシアの帝冠の忠実なしもべであった。そうではなくて、人種と文化共同体としてドイツ人であり続けたのだ。

ロシア領バルト海沿岸地方の現在の住民のうち、約8パーセントがドイツ人であり、しかも彼らはまず大地主であり、都市の住民である。

われわれは、血族であるこれらの人々のことを誇ってよいだろう。彼らは、どんな障害や敵意にもかかわらずみずからのドイツ性をこれまで保持することができたし、今なお保持することができているのだ。この戦争が終わったのち、彼らがもっとよい運命に恵まれることを望みたい。

日本の歴史（18）

ヨーロッパ文化の普及によって、立憲政導入の努力にますます強い根拠づけがなされた。1881年の勅令は、憲法の導入と1890年の帝国議会の召集を約束した。その間に、枢密顧問官伊藤博文は、ヨーロッパ諸国の憲法を研究するために、ヨーロッパに派遣された。国政は改善され、地方自

治体の行政は新たに整備された。約束されていた憲法は 1889 年に発布された。これは基本的にプロイセンの憲法に倣って作られたものだ。立法権を持つのは天皇と貴族院と国民議会〔衆議院〕である。国民議会のための投票権を持つのは、10 円以上の直接税を払っているすべての日本人である。そのような高い税金は、下層階級の平均的収入に見合ったものではないので、国民の大部分は納めることができず、それゆえ彼らには政治的な選挙権がない。国民議会〔衆議院〕の議員たちは、プロイセンとは違って直接選挙される。

対外関係の復活により、朝鮮を征服したいという古くからの欲求が当然のように呼び覚まされていた。朝鮮における日本の影響はしだいに顕著なものとなり、この影響を排除しようとするさまざまな集団の暴動を引き起こした。そのさい、日本人が殺されたりその財産が破壊されたりすることが幾度もあったため、これらの暴動は日本政府に介入と日本軍のソウル駐留の口実を与えた。しかしそのとき、これまで朝鮮において競争相手を持っていなかった中国の抵抗に会った。この時中国は、日本と同様守備隊をソウルに駐留させた。日中のソウル駐留軍のあいだで戦闘があり、その結果紛争の十分なきっかけはあったのだが、日本はさしあたり中国とのこれ以上の武力衝突を避けた。1885 年の天津条約によって中国と平和的に話をつけたのである。朝鮮駐留軍は撤退し、この国の独立が承認された。両国は、朝鮮において万一作戦行動をおこなう場合には、あらかじめ相互に通告することとした。

つづく

収容所生活より

この前の日曜日、われわれの誰もがおそらくこれから先もしばしば思い起こすような祝典があった。ワルシャワ陥落がきっかけで、感謝の礼拝がおこなわれたのだ。「諸人（もろびと）よ、神に感謝せよ」という古くからの壮麗な教会歌で始められた祈祷ののち、デュムラー大尉がスピーチをし、その中でこの日の意味を指摘した。まとめとして彼がもう一度はっきりと示したのは、最終的にポーランドの首都征服にいたった一連の出来事がどのように展開したかということである。彼は心のこもった言葉で、祖国にいるわれらの戦友たちのことを語った。彼らの犠牲をいとわぬ英雄的なはたらきが、今再びドイツに最終的な勝利への力強い一步を踏み出させたのである。スピーチは皇帝陛下万歳で頂点に達し、これに皆が感激して和した。それから、われらのオーケストラが愛すべき祖国の歌と華麗な軍隊行進曲をいろいろと演奏してくれた。このような楽音とともにわれらの父祖たちも出征し、勝利を得てきたのだ。こうしてわれわれも、自分たちなりに勝利を祝い、このところドイツ中に渦巻いている力強い歓呼と恍惚とさせるような感激の一端を感じることができた。それはまるで、教会の鐘の音と町々の通りを歩く群衆の歌が遠い故郷からここまで押し寄せてくるかのようであった。

良心的な記録者としてさらに記しておかなければならないのは、上とは別の、非常に散文的な仕方ではあるが、この日のお祭り気分が強調されていたということである。献立予定表に特別メニューが示されていたのである。朝食にはハムが、昼にはかぼちゃのコンポートが出された。

残念ながら昼頃雨が降り出し、野外コンサートはお流れとなった。その次の機会は水曜日によくやってきたのだが、われらのオーケストラは流れたコンサートの十分な償いをしてくれて、再び皆の盛大な喝采を浴び

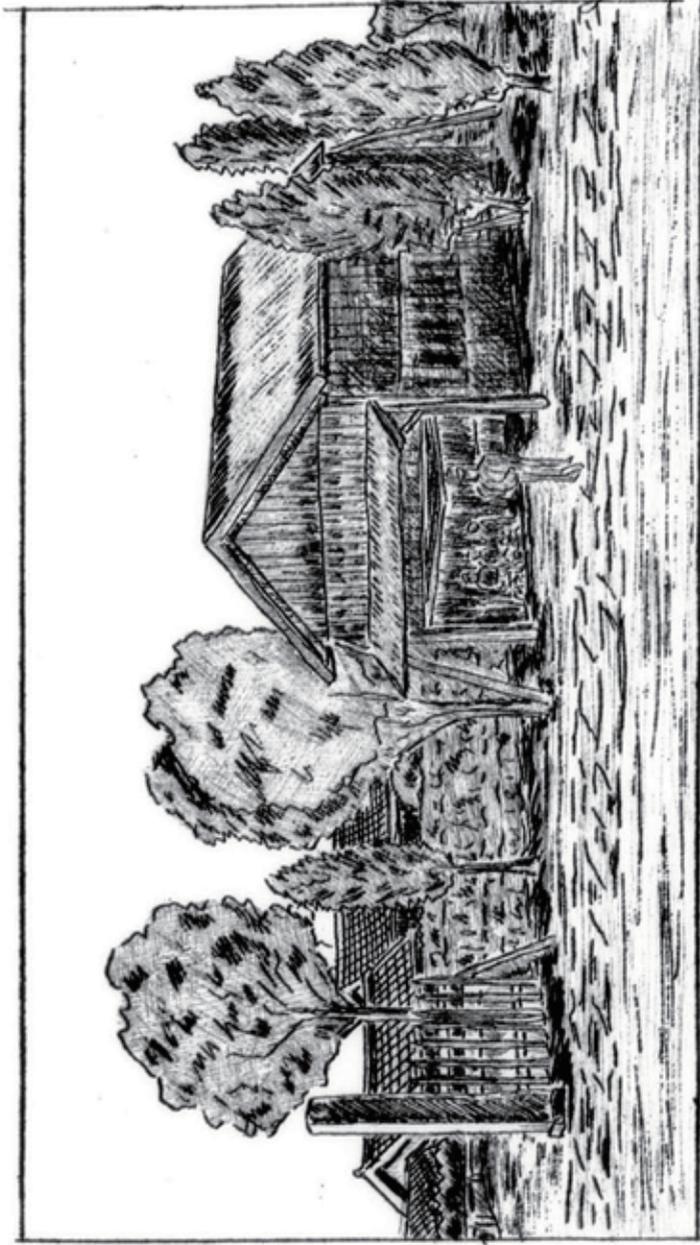
た。特に気に入ったのは、オーケストラの伴奏つきではじめて聴いたヴァイオリン独奏曲『ヴァイオリン弾きの郷愁』である。今日の午後はもっと天気が良くなってほしいものだ。本日のプログラムは以下のとおり。

1. 『万歳、皇帝がやってくる』 自動車マーチ J. トランスラトア
2. 『子どもの情景』 より「トロイメライ」 R. シューマン
3. 『褐色のワルツ』 クリーア
4. a. 「可愛い小さな女の子」 J. ジルベール
- b. 「夜に」 オペレッタ『子どもの女王』より
5. 『アイシャ』 インディアン間奏曲 J. リンゼイ

二人対四十人

われわれは、『ノイエ・ハンプルガー・ツァイトウング』紙で、海軍砲兵隊がベルギーで参加した戦いの一コマである、次のようなエピソードを見つけた。

海と・・・のあいだの砂丘における、第二海軍砲兵連隊第三大隊の突撃のさいに、大胆さと冷静さで際立っていたのは、ヴィースバーデン郊外ウージンゲン出身の火工副下士ディーツと、ケルン・ミュールハイム出身の二等砲兵クニーペンだった。二人は、最前線を進んでいると、薄明りが外に漏れている二軒の家にとどりついた。彼らは一軒のドアを突き破り、クニーペンが中に向かって叫んだ。“A bas les armes! Vous êtes cernés! - Autrement vous serez fusillés!” “武器を置け。諸君は包囲されている。さもないと射殺するぞ。”けれども敵は包囲されておらず、この二人が前に立っているだけだったのだ。しかしフランス人たちはすぐに手を上げて答えた。“Pardon, monsieur! — Votre camarade! Votre camarade!” “ちょっと待って。あなたの仲間ですよ、仲間。”幾人かのフランス人はもう家から



収容所の情景

日本人衛兵の建物

その3

追い出されていたが、突然もう一軒の家からひとりのフランス人が出てきてディーツを撃ち、彼は倒れた。すると他のフランス人はクニーペンを攻撃しようとした。しかしこの男はすぐ近くにいた敵をつかまえてドアから外に放り投げ、続いて何人かも放り投げた。するとフランス人たちは次々に干し草置き場の屋根裏からしぶしぶ降りてきて、その間に到着していた海軍砲兵たちに外で引き取られた。

こうして、この夜大隊が捕虜にしたフランス人の中の 40 人あまりが、クニーペンとディーツの手柄によるものだった。クニーペンはその後さらにディーツの包帯を巻いていたが、自分自身も重い傷を負っていた。重症のディーツは数日後亡くなった。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビンヨップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 33 問解答

1. Tb5 - d5 任意の手
2. D か S で詰み

第 34 問解答

1. e2 - e4 Lc4 - b5
2. Da4 - d1 任意の手
3. Dd1 - g4(d5) 詰み
- 1 Lc4 - d5
2. c5 - c6 任意の手
3. D で詰み

第 33 問正解者

ヨーゼフ・ヴェーバー、ローデ

第 35 問

白：Kb8, Da2, Tc8, Ld4, e2, Sb4, f7, Be3, f2

黒：Ke4, Tg1, Lb2, h1, Sb5, h4, Be5, e6, g5, g6

2 手詰め

第 36 問

白：Kb7, Dc1, Sc6, Bd3, e5, f4

黒：Kd5, Ta4, e8, Sa8, Bd4, e6

3 手詰め

スポーツ

掲示によってすでに通知されているように、今月中頃から一連のスポーツ競技会が実施される予定である。この催しを特に盛り上げるために、将校、准士官からささやかな賞品がいくつも寄付された。全部で 9 種目の陸上競技への参加者には二つの特別賞が予定されているが、これは総合得点 1 位と 2 位の選手に与えられる。

最初は、陸上競技の 10 種目—十種競技—をまとめておこなう計画であったが、できるだけ多くの参加の機会を提供するために、間隔をあけることになった。それゆえ、あらゆる競技にエントリーすることができる。

以下のようなプログラムが組まれた。

走り高跳び (最低ラインは 115 cm。5 cm ごとに 2 点追加)

走り幅跳び (踏切板つき。最低ラインは 4 m。10 cm ごとに 2 点追加)

高幅跳び (踏切板つき。最低ラインは高さ 110cm、幅 2m。高さ 5cm ごと、幅 10cm ごとに 2 点追加)

ドイツ式三段跳び (最低ラインは 9m。30cm ごとに 2 点追加)

棒高跳び (最低ラインは 1.80m。10cm ごとに 2 点追加)

石投げ（重量 15 キロ、4—7m。最長の投擲のみ採用）

砲丸投げ（重量 10 キロ、5—9m。最長の投擲のみ採用）

100 メートル走（最低ラインは 14 秒。12 秒を切れば 20 点）

ファウストバル競技（新聞で公表された規則に従う。前半後半 20 分ずつ）

サッカー競技（前半後半 30 分ずつで、その間の休憩は 10 分）

跳躍について：各参加者は 2 回跳躍できる。一度目は紐に触れるか落としてもよい。二度目だと失格になる。紐に触れたが落ちなかった場合には、1 点加算される。

石投げと砲丸投げについて：各競技者は 2 回投げ、よい方の成績のみ数えられる。

この催しは 8 月 16 日に、ファウストバルの最初の予選から始まる見込みである。サッカーの最初の予選は、天気が悪くなければ 8 月 20 日の朝実施されるだろう。ひとつのチームが同じ日に二回試合をしないように配慮がなされるだろう。つまり、その合間にさまざまな運動競技に参加する機会もあるわけだ。

プログラムのそれ以外の種目が進められてゆく順序は、デムラー大尉を長とする委員会 — キュッパー火工副下士、レンケル曹長、グレーニング曹長 — によって決定される。

参加申し込みは、できるだけすみやかにキュッパー火工副下士におこなわれたし。

「エムデン」上陸隊体験記（6）

われわれはあまり進むことができず、もう一艘のボートも見えなかった。暗くもなってきた。そこでわれわれは、マストの厚板や古い木材を使って、万一の場合につかまって泳いで行けるような筏を作りはじめた。

しかし、まもなく先行のボートがまた見えてきた。隊長は、引き返してすばやく小さなカヌーをこちらによこした。それとわれわれのカヌーには、それぞれ二人乗ることができたが、まず病人たちを渡した。するとアラブ人たちも手伝ってくれはじめた。ところが、そのとき頭まで水につかっていたわれわれの医師の熱帯用ヘルメットが突然水から突き出してきた。これを見たアラブ人たちは退散していった。われわれはキリスト教徒であり、彼らには味方であることがわからなかったのだ。このとき、もう一艘のザンブクが半時間でつかまえられるぐらいの近くにいたが、波が大きすぎた。人を渡すさいには、そのつど泳ぎのうまいのがひとりカヌーのロープにつかまった。真っ暗になって、われわれにはもうボートが見えなくなった。というのも、向こうの乗員は風のために火を燈しておくことができなかったからだ。部下たちは「どの方向に泳ぎましょうか」と尋ねた。私は言った。「これこれの星の方角に泳いでくれ。だいたいその方向のはずだ。」ついに向こうに、まだ残っていた「エムデン」の松明のひとつが上がった。しかし、われわれは水濡れにもひどく苦しめられた。ひとりの水兵が叫んだ。「ああ、もうだめだ。探照灯だ。」このとき最も真価を発揮したのがシュミット少尉であるが、彼は残念ながらのちに戦死した。10時頃、われわれは皆向こうに乗り移った。しかし、チフスに侵されていたカイル水兵は、このときひどく衰弱してしまい、一週間後に死んだ。翌朝、われわれは難破した方の船まで引き返し、海中に落ちた武器を探した。アラブ人たちは実に潜水がうまく、なお多くのものを拾い上げてくれた。機関銃は2丁とも、小銃は10丁まで引き上げたが、もちろん中まで水浸しだった。後に射撃のとき、多くが不発だった。

このときわれわれはアラブ人も合わせて70人で、小さなボートの上で次の晩まで過ごした。そしてわれわれはコンフィダで投錨し、サーミ・ベイと会い、それから今に至るまで彼といっしょなのである。彼はすでに以前にトルコ政府に仕えて有能さを証明していたが、ここ二カ月のあいだは旅の世話人として立派に務めを果たしてくれた。彼はこの地の事情に通じた活動的な人で、われわれにもっと大きな54トンのボートを調達してくれて、みずから細君とともに小さなザンブクに乗って付き添ってくれた。20日から24日にかけて、リトまで順調に帆走できた。そこでサーミ・ベイが知らせてくれたところによれば、ジッダ沖で三隻のイギリス艦がわれわれをつかまえようと遊弋^{ゆうよく}しているとのことであった。そこで私は、しばらく陸路を取ろうと提案した。ここで再び海から上がるのは気が進まなかったが、そうせざるをえなかった。

「もちろんリトはこういうところだ」と、ミュッケはこれから通る砂漠を指しながら言った。

だから、すぐにキャラヴァンを編成するのはとても難しいことだった。それまでのあいだ、われわれは船上にとどまった。出発は28日だった。イギリスのスパイがここにもいるかもしれないという予感が、おぼろげながらあった。進めるのは夜だけだった。眠るときは上手の井戸のそばに宿営し、病人用のテントをひとつだけ張った。トルコ政府は、われわれの消息を知ってすぐ16頭のよいラクダを手配して、ジッダまで二日行程のところまで迎えてくれた。

「4月1日の夜、突然不穏な情勢になった。私は先頭を進んだ」と、フォン・ミュッケは語る。

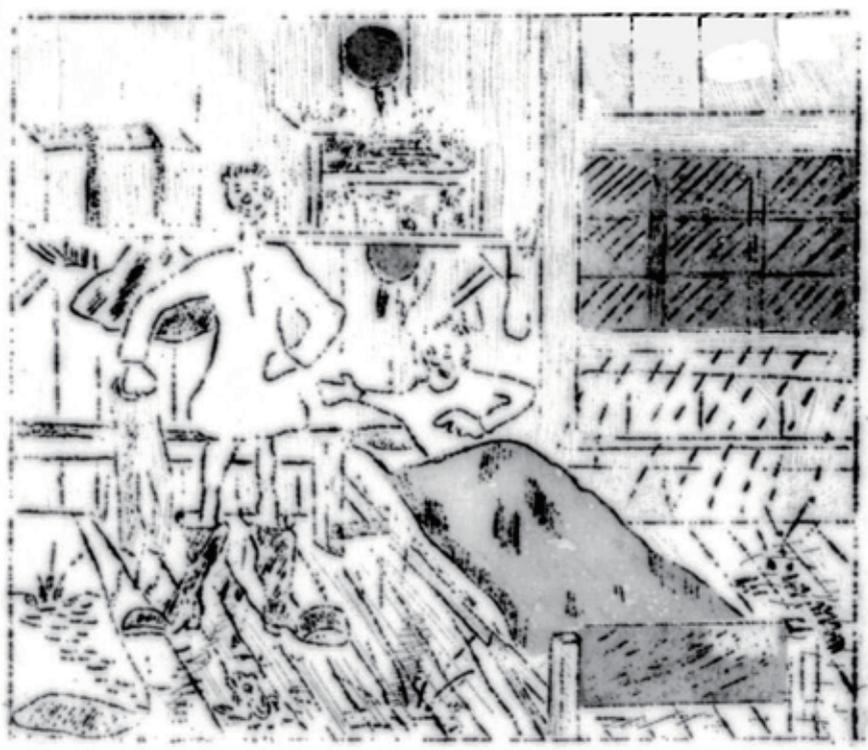
すべての銃火器が戦闘態勢に入った。ここでイギリスが買収していたベドウィン族の襲撃が懸念されたからである。少し明るくなるともう、今日はこれで大丈夫だろうと思った。われわれは疲れていて、18時間も騎行していたからである。



シュピーゲル（鏡）

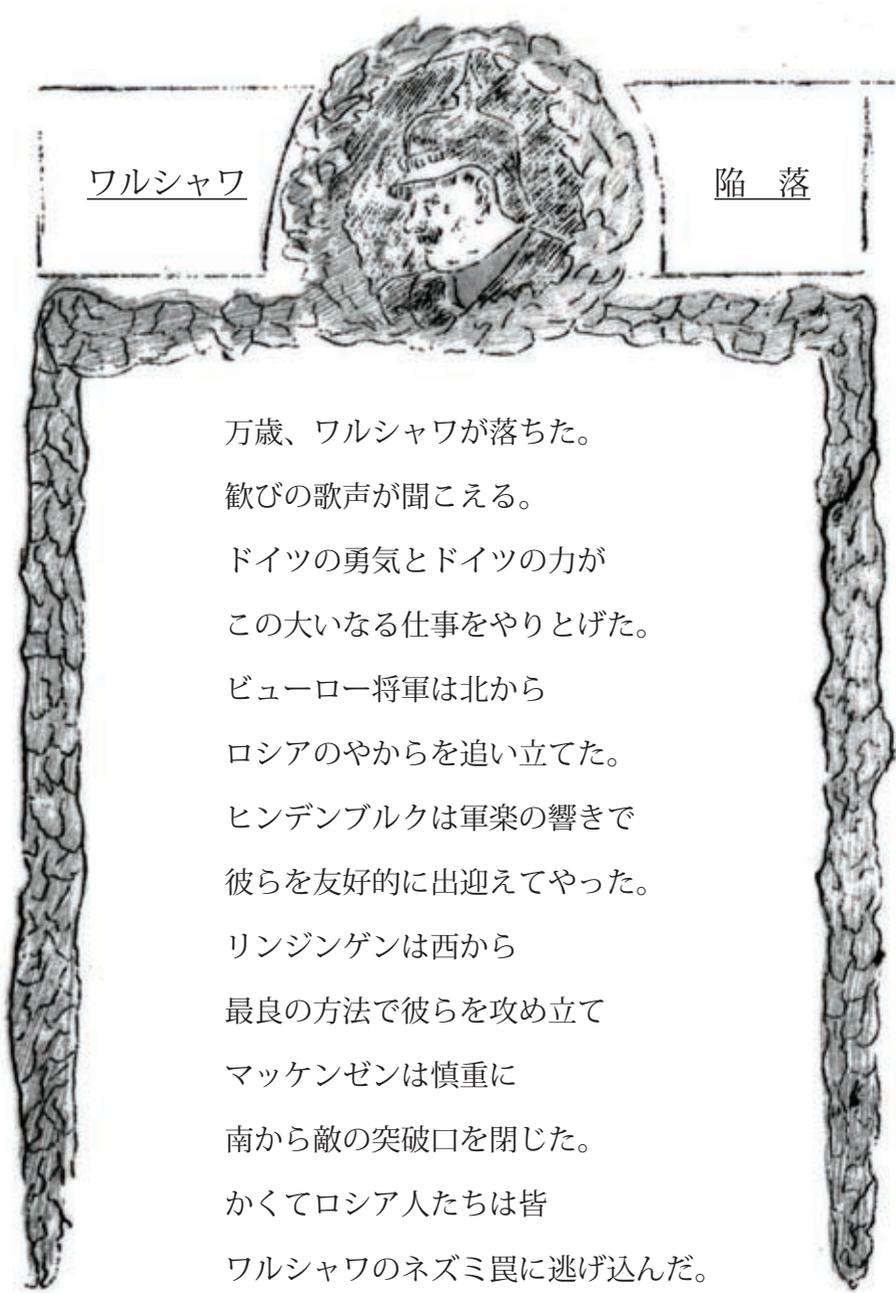
『トクシマ・アンツァイ
ガー』20号ユーモア
付録
1915年8月15日

土砂降りのときのバラックの中
ベッドがあるのがやっぱりいいね。



ワルシャワ

陥落



万歳、ワルシャワが落ちた。
歓びの歌声が聞こえる。
ドイツの勇気とドイツの力が
この大なる仕事をやりとげた。
ビューロー将軍は北から
ロシアのやからを追い立てた。
ヒンデブルクは軍楽の響きで
彼らを友好的に出迎えてやった。
リンジンゲンは西から
最良の方法で彼らを攻め立て
マッケンゼンは慎重に
南から敵の突破口を閉じた。
かくてロシア人たちは皆
ワルシャワのネズミ罠に逃げ込んだ。



イワンゴロドは、不愉快に
思ったろうが、
哨所でまだ笛を吹きつつ
歩いていた。
ノヴォ・ゲオルギエオスクその他の
地もこれにつづくことだろう。
それからリガの陥落も、これから
すぐにでも期待できそうだ。
ロシアの熊よ、おまえはもう
疲れはて、
その爪も切り取られて
しまっていた。
そいつが今に伸びてくるより前に
フランスでもこの調子で進撃だ。

すると諸君は皆、何も笑えなくなり、
結局はもう、講和を結ぶしかない。
愛する祖国はやすらうことができ、
まもなく敵は皆小さくなるだろう。

「トクシマ・アンツアイガー」の
ワルシャワ陥落！を知らせる掲示板の前で



阿呆がうつる！

阿呆というのはうつるもの。
これは本当のことだ。
その証拠を見たければ、
今日一度、バラックに
入ってみるだけでよい。
すぐに場所がなくなるのだ。
なぜかはすぐにわかること。
ある男が夜、サソリに
かみつかれそうになった。
そのあと彼はすぐ考えた。
「こん畜生、こいつは飛べないはず。
すぐにこの場に寝台が必要だ。
そしたら高いところで寝られる。」
二日後、部屋の隅っこに
なんとも素敵なおベッドがあった。
多くの者は考えた。「おれにも
こんなのがありさえすればなあ。
だけど、そんな許可がおりるか
どうか、あやしいもんだ。」
しかし次の日、「オフィス」に
向かって急ぐやつがいた。
なんとその手には、見るがよい、
大きな虫をつかまえている。
そこでやつは将校殿に言う。

こいつのせいで夜、目が覚めました。
そのうえ、と言って
将校殿に指の傷を見せながら、
「こん畜生にやられたんです。
三時頃だったでしょうか。
ベッドだけはどうしても必要です。
でないともうやっつけていけません。
這いまわる虫けらだらけでは。
あなたもそれはわかるはず。」
本当のところ、この虫は
外に出かけて行って
つかまえたものだった。
ただベッドを作るためだけに。
将校はこう答えた。
「許可するわけにはいかんな。
君がベッドを作ったら、
皆すぐ同じことをやるだろうから。」
彼らのうちの三人は、突然ベッドが
どうしても必要と思えてきた。
ある家具職人は、一台2ドルで
作りましようとして申し出た。
「できますよ。しかも今日中に。
これはほんとにお得だよ。」
家具職人は注文によるこび、

三人とも熱心になる。
「これでもう安心して寝られる。
優雅に暮らせるってもんだ。
その上、もう這い回る虫けらの
餌食にならなくてすむぞ。」
三日たつと、そこには
三つのベッドが全部できていた。
所有者たちの誰もが言った。
「なんてうれしいことだろう。」
これでもって場所がたくさん
ふさがってしまわないように、
昼間はおそらく、ベッドを
重ねておかねばならんな。
皆はそれらをながめて
おどろきをあらわにする。
「おれたちもこんなベッドを
持たねば。」
まわりでそんなひそひそ話が
聞こえる。
けれどもまずは皆が値段に驚く。
なんとなればプロイセンの兵隊は
特に囚われの身になってから
金持ちとはとうてい言えないので。
そこであるとき、洒落者のひとりが
材木を二本、持ってくる。
「20 セントで買ったんだ。

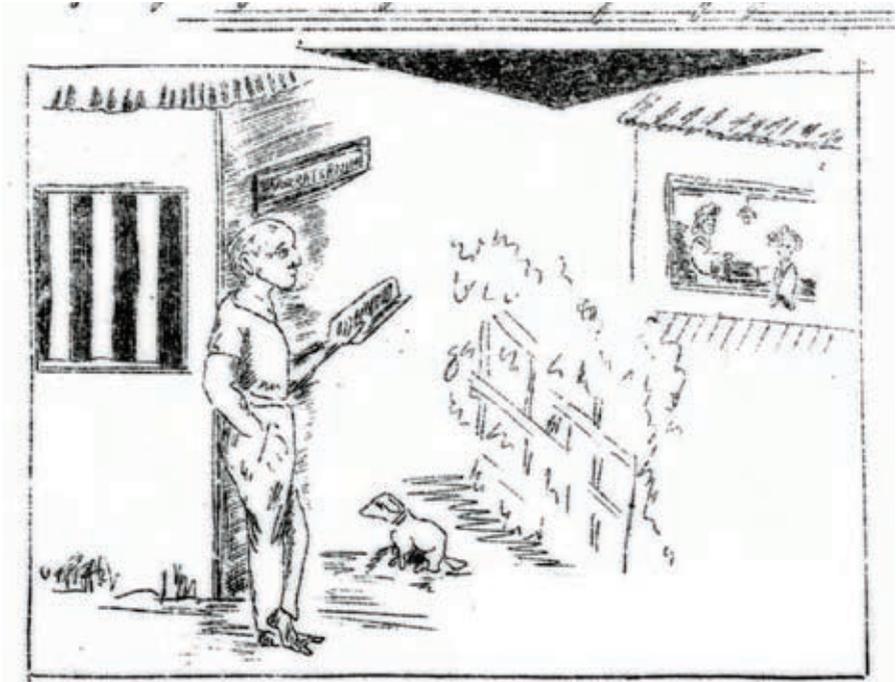
これがベッドになるんだ。
ビール箱もひとつ買おう。
余分に 10 セント必要だ。
そうすりゃ安いベッドが持てて、
とても心地よく眠れるぞ。」
次の何日間か、何十人も
町の方に走ってゆくのが見える。
「あれが安く手に入るのなら、
おれたちも何か買いに行こう。」
こうしてバラックの裏で
ごちゃごちゃと作業がなされた。
誰もがそれなりにやっている。
「おまえすごく捗ってるな。」
皆が仕事を急いで、
一番になりたがる。
すべてのベッドが、
ほとんど同時に入ってくる。
あの最初の三人の例はというと
もう誰も気にとめない。
誰もがただできるだけ広い場所を
ベッドのために取ろうとする。
ひっそりと品良く張出し窓に
おさまっていた机があった。
新しいベッドが入ってきて
「おまえのこの机をどけろ。」
否が応でもどけねばならぬ。

もう6か月が過ぎた。
やりすぎだ、という声もあった。
だが、それも効き目はなかった。
ひとつだけ、知りたいことがある。
誰もこのことを考えないようだ。
もうすぐはじまる冬に、机や椅子を
どこに置けばよいのだろう。
それから四つのストーブが
バラックに入らないのでは。
そのための余地はほとんどない。
諸君もこれはわかるだろう。
ストーブをあきらめる者は
いないと言ってよいだろう。
やつらが北極探検者として
役に立たないのは明らかだ。
やつらは朝起きるとすぐに
顔も洗わないうちに
ストーブの所に行ってくつろぐ。
手をポケットに入れたまま。
前のように四つのストーブを
バラックに入れたいなら、
解決策を見つけねばならぬ。
今のままではだめだろう。
こんなにベッドが多くては、
その余地がもう見つからない。
こいつら40人の兵隊が、

もっと前に考えていたらなあ。
ホールにさえも、今は
いろいろなベッドがある。
とうとう大佐が巡検して
このとんでもないものを見た。
彼は言った。「これはだめだ。
いったいどういうつもりだ。
だいたいベッドを作る許可を
だれが皆に出したのだ。
我慢ならん。こいつをどけろ。
もっときちんとやってくれ。
どいつもこいつもすぐに
勝手なことをやりおって。」
それから今朝、点呼のときだ。
彼らはぞっとすることを聞いた。
ベッドはすべて撤去すべし。
これはなんということだ。
出ていったおれたちの金が、
なんとも残念で仕方がない。
しかしこの世界での生活は、
なんとみじめなことだろう。
まだベッドを作っていなかった
のは、わずかな者たちだったが、
こう思った。「へえ、そうかな。
おまえらが自分たち同士で
騙し合っただけじゃないか。」

紙面の余裕がないため、かように長い寄稿文は今後掲載できない。

編集部



- A. ロイターはどこだい？
- B. うん、やつは英語の勉強さ。